

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 吳翠華

本論文のテーマは、中国明清の兩代に編纂された三種の「童謡」集、呂坤の『演小兒語』、鄭旭旦の『天籟集』、悟痴生の『広天籟集』についてである。

中国では長い歴史を通じて、「童謡」に関心が向けられ、記録されてきたが、その関心のあり方によって、(Ⅰ) 歴史書・歌謡集に記されている童謡、(Ⅱ) 明・清における知識人による童謡集の編纂、(Ⅲ) 清末以後、民俗学の一環としての童謡の収集・創作・研究、の三段階に分けて考えることができるとする。本論文はこれまで研究者にほとんど注意されることのなかった(Ⅱ)の段階における「童謡」とその編纂者の意図とを検討したものである。

第一章では、呂坤が社会教育、童蒙教育のためにこの童謡集『演小兒語』を編んだことを述べ、その背景を当時の社会状況、呂坤の個人的な閱歴と思想(特に呂坤の思想方面の著作である『呻吟語』との関係)、さらには通俗文学が隆盛を迎えた明代末期の文化状況などの幅広い諸点から明らかにしている点、特に高く評価することができる。

第二章では鄭旭旦の『天籟集』を取り扱う。呂坤にあつては、当時の童謡を教育の目的に合わせて改変していたが、『天籟集』では、童謡をそのまま記録していること。しかし、不遇の知識人であった鄭旭旦は、評語において、みずからの不平の表現として、童謡を解釈していることが明らかにされている。歌の配列は、八股文を意識しているのではないかとの指摘は興味深いものがある。

第三章は悟痴生の『広天籟集』について。悟痴生は、基本的には『天籟集』の考え方を受け継いでいるが、より子供本位の歌も収められ、(Ⅲ)の段階への萌芽を見ることができる。

末尾に三種の童謡集に収められた童謡全文の日本語訳を付していることも、このテーマについての日本における最初の業績であることを考えると、きわめて大きな意義が認められる。

審査の席上では建設的な立場から、(1)「童謡」「子供」などの概念をめぐって、より厳密な考察が必要ではないか、(2)論文の構成、文献の引用のしかたなどに改善の余地があるのではないか、(3)引用原文の日本語訳に今ひとつの正確さが要求されるのではないか、などの指摘がなされた。だがそれらは、これまで世界各国で簡単な紹介にとどまっていたこれら童謡集の初の本格的な研究業績であり、明清兩代におけるこれら童謡集の意義と位置づけとを明らかにした、本論文の成果の重要性をそこなうものではない。よって本委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するものであると判断する。